

最近の魚病の発生状況について

長崎県総合水産試験場 環境養殖技術開発センター 養殖技術科

はじめに

養殖業者の皆様におかれましては、年末の出荷シーズンに入り、最も多忙な時期かと思えます。

今年10月までの魚病の診断件数はコイヘルペスウイルスを除くと、197件と昨年同期と同程度となっています。本県の養殖は、クロマグロ、マハタ、ホシガレイ等の新魚種や陸上養殖が多くなっており、発生する魚病もさまざまなものがあります。

今回は、最近の魚病発生動向、ワクチン接種プリで発生した 溶血性レンサ球菌症、クロマグロでみられた脳粘液胞子虫と微胞子虫の寄生についてご紹介します。

最近の魚病発生動向

プリでは、ワクチン接種魚群で 溶血性レンサ球菌症が発症する事例が複数みられるようになりました。

トラフグでは、シュードカリグス症の被害が拡大しているようです。また、粘液胞子虫性やせ病、ヘテロボツリウム(エラムシ)症、滑走細菌症の被害も多いようです。

マダイでは、昨年あたりからエドワジエラ症の発生が多くなり、今年は被害も出ています。

ヒラメでは、スクーチカ症、エドワジエラ症、VHSの被害が大きく、新型レンサ球菌(ストレプトコッカス・パラウベリス)症の発生もみられるようになりました。

クロマグロでは、イリドウイルス病、血管内吸虫症の発生が多く、今年には脳粘液胞子虫や微

胞子虫(べこ病の原因寄生虫)の寄生が初めて確認されました。

陸上養殖ではスクーチカ症、白点病、アミルウージニウム症などの寄生虫が問題となっています。

ワクチン接種プリのレンサ球菌症について

溶血性レンサ球菌(ラクトコッカス・ガルピエ)用ワクチンの接種率が95%を超えており、**溶血性レンサ球菌症の被害は、ワクチンが普及する前に比べ大きく減少したと実感している**養殖業者の方も多いと思えます

魚病検査の結果から、平成19年度に6件、平成20年度に2件、溶血性レンサ球菌用ワクチンの接種後に 溶血性レンサ球菌症の発生が確認されています。

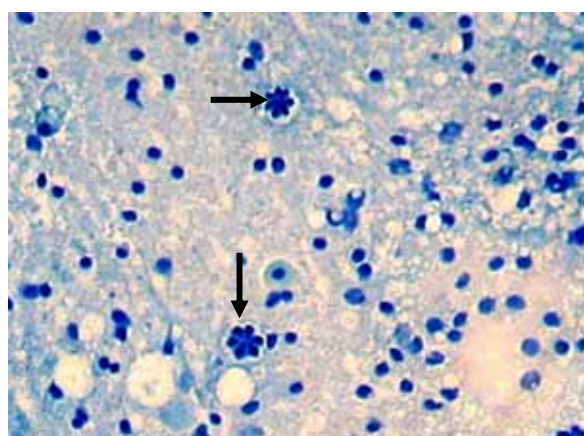
平成19年度にワクチン接種魚群から分離された 溶血性レンサ球菌と20年以上前の保存菌株を用いてワクチンの有効性試験を行なった結果、**ワクチンの有効性を確認**しました。

作業の効率性はもちろん大事ですが、「**ワクチン接種時の針詰まりによるワクチン未接種魚が存在している。**」との報告があることから、**随時、ワクチン接種尾数とワクチン接種量が合っているか、針詰まりがないかの確認**を行なうことで、ワクチン接種魚群でレンサ球菌症が発生するといった事例は減少すると考えられます

クロマグロの脳粘液胞子虫について

昨年の7~9月に導入された種苗で今年の5~9月に斃死した個体から確認されました。

スズキでは、体を屈曲させ、旋回するような特徴のある遊泳がみられ、解剖すると脳の周辺に脳粘液胞子虫（クドア・ヤスナガイ）の小球状のシストの存在が報告されています。今回のクロマグロではそのような遊泳や脳の周辺のシストは未確認ですが、脳のスタンプ標本で脳粘液胞子虫が確認されました。今のところ、斃死との因果関係は不明ですが、今後注意が必要な寄生虫と考えられます。



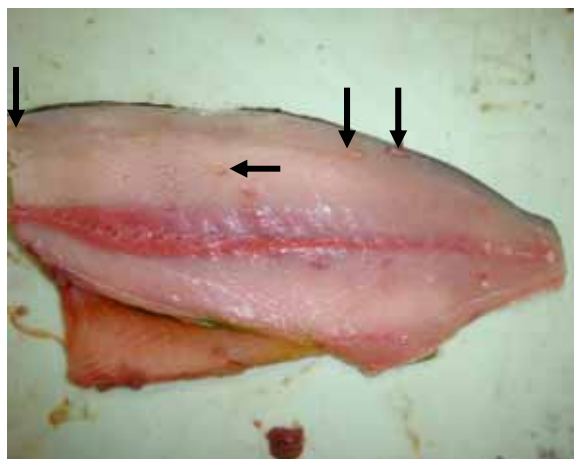
【写真】クロマグロの脳粘液胞子虫

クロマグロの微胞子虫について

今年の7月に導入された種苗で8月に斃死した個体の筋肉中から微胞子虫シストが確認されました。

外観はブリで報告されているべこ病の微胞子虫（ミクロスポリジウム・セリオレ）と同様でした。

9月に斃死した個体では微胞子虫シストがみられなくなりましたが、今回の斃死魚はイリドウイルス病であったことから、微胞子虫の影響は少なかったようですが、今後注意が必要な寄生虫と考えられます。



【写真】クロマグロの微胞子虫シスト

おわりに

今回紹介しましたように、近年、新たな魚病が確認されています。

さらに、消費者の安全・安心に対する意識の向上などから、養殖業者の皆様には、これまで以上に水産用医薬品の適正使用に十分留意していただく必要があります。

投薬などが必要と思われる魚病が発生したときは、より良い対策を取るためにも総合水産試験場又は最寄りの水産業普及指導センターへご相談ください。

総合水産試験場では、魚病対策に関する研究や、新たな水産用医薬品の承認に向けた取り組みを行うとともに、魚病の診断や対策と予防など魚病全般に対する相談を随時受け付けておりますので、相談窓口である水産試験場養殖技術科（095-850-6319）へご連絡ください。

（主任研究員 宮原 治郎）